

保連とくしま

2024年
No.90

令和6年3月1日発行

発行所 〒770-0943 徳島市中昭和町1丁目2 県立総合福祉センター内 徳島県保育事業連合会 電話 (088) 654-4461(代)

健やかにのびのび過ごせる場所をめざして ～一人一人を大切にする保育～

今注目の
“保育” 紹介

藍住町 藍住町立中央保育所



藍住町立中央保育所は、改築工事を行い平成14年に新しくなり、0歳児保育が開始となりました。藍住町は吉野川の北部に位置し、商工業ともに盛んな地域で、女性の就業率も高く共働き家庭や核家族が多い町です。現在は、私立認可保育園11施設に伴い、町立保育所は縮小となり定員は96名で、令和5年度は0歳児から3歳児（今年度0歳児入所なし）56名が、毎日楽しく生活しています。

園庭は2か所ありますが、中園庭は広く、自慢の築山があります。春秋には草花集めや虫探し、夏はクヌギの木が木陰をつくり心地よさを体験できる場所ともなっています。また、傾斜を使っの築山滑りなどはダイナミックに段ボールやソリで遊び、子ども達の歓喜の声が響き渡ります。保育所の中

で、四季折々の楽しい経験ができる自然豊かな環境です。

今年度は、新型コロナウイルス感染症が5類となり自粛していた行事も再開し、運動会や発表会も人数を制限することなくたくさんの保護者の方に見に来ていただくことができました。また、地域との交流・高校生のインターンシップや中学生の職場体験も復活して繋がりも戻ってきました。

今後も、町で唯一の公立保育所として本保育所の《一めざす子ども像》である「元気に活動する子ども」「友達と仲良く遊ぶ子ども」「自分の思いを素直に表現できる子ども」へと健やかに育てていくために、職員全員で連携を図りながら子ども達一人一人に寄り添って毎日を過ごしています。

所長 的場 紀子



年度末を前にして思う事

徳島県保育事業連合会 会長 **大和 忠広**

寒い冬も、立春を過ぎると春へと足早に移っていきます。その中で生活をする、私たちも身体に込めた力も和らいでいきます。過ぎ去ってみれば、温かいの、寒いのと色とりどりの想いを語り始めるのが、私たちの営みなのでしょう。その最中では、冷たい北風に襟を立てたり、かじかんだ手をこすり合わせたり、冬は、やはり寒くて冷たいものなのです。来年同じような寒さの冬に出会ったとしても、例年と違った感じ方の想いを語るのでしょう。ほとんどを忘れ去られることが、人間の勝ち得た進化なのでしょう。

さて、就学前の施設で何が起きているのか、一番先に思い浮かぶことは、不適切保育ではないでしょうか。園児への虐待が疑われる事柄から、保育士の子育てへの思いが強すぎることから起こる不適切な保育まで、たくさん表面に現れてきています。徳島県でも例外ではありません。その防止法の一つとして、保育室へのカメラの設置が挙げられています。もうすでに設置済みの施設もあるようです。カメラに見つめられて、不適切保育は多少減っていくでしょう。しかし、この事が果たして不適切保育の全面解消につながるでしょうか。疑問を感じるのは、私だけではないと思われます。結果として、状況、責任の所在は一目瞭然で分かります。責任者の責任回避のみに繋がらなければ良いと思います。

それでは、不適切保育解消に向けて私たちのしなければならないことは何なのでしょう。それは保育士個人の持つ子育てへの問題の解決が大事なのではないかと思われます。その一つ目が保育士の心身の健康上の不安。二つ目が、保育士の保育技術等、知識と教養の不足。三つ目は、保育を行う環境と計画の不備。他にたくさんの要を挙げられる方もおいでになると思います。そんなに単純ではないからです。解決の方法は難しいと思われる人もあるでしょう。しかしながら、この問題を回避するのではなく、乗り越えなければならないのです。県私保連は、研修会を開催しました。私たちは、賛同し多くが参加する努力をしなければなりません。また、私たちも研修を始めなければなりません。多くを学び、深く理解し、虐待を受ける立場の子どもたちを理解せねばなりません。私たち保育士を愛してくれる子どもたちが、元気で優しく育っていくことができるために。施設の中で色々な問題を抱えて、大変なことも知れませんが、しかし努力することも忘れないでください。私たちが、苦情を並べることで、その脱却への努力も必要なのです。

時代は待ってくれません。『こども誰でも通園制度（仮称）』が始まろうとしているのです。幼児を持つ親として、本当に耳に優しい言葉とは思いませんか。子育てに困れば、何処の保育施設、就学前施設に入園ができると思いませんか。また、困らなくても入園させてくださいと言われかねません。保育業界のほうでは、一時保育との違いはどうかとか、職員配置はどうかとか、色々と問題点を提起しました。本当に私たちに優しく、子育て支援を受ける家庭に優しいものなのでしょうか。これからの成り行きに期待したいものです。どうか、子育て中のご家庭に期待の持てる制度になって欲しいと思います。

また配置基準の問題も、結果が出つつあります。しかし、現場で働くものとして、配置基準を語るのであれば、調理員の配置基準を見直していただきたいと、強く思うのです。50名以下の施設は、調理員1人となっています。県下で調理員がひとりで保育園の給食を作られているところはないとは思いますが、このことも問題なのです。保育と給食は保育の両輪なのです。職員が苦痛を味わったり、運営に支障を来したりする、不安材料は取り除く必要があります。健全で安定的な施設運営を目指したいものです。

幼児教育の本質は、環境を通した遊びにあり、子ども自ら環境に働きかけ、遊びをどのように作り出すかが大切であるとのこと。自ら作る遊びには「何をして・誰と・どうやって・何がどれくらい必要か」など考えなければならないことがたくさん生じてきます。これが思考を深め、イメージや学びの芽生えの形成につながります。子どもが遊びに「のめりこむ・没入・時間を忘れる」というような幼児期にしかできない経験をする為に、保育者として必要なことや役割を教えてくださいました。

まず、子どものどのような力を育てるのかを考えた上で、環境の構成について話し合うことの大切さです。保育者が用意したもの（おもちゃで遊ぶ）ではなく、子ども自ら遊びを見つける（おもちゃにして遊ぶ）経験が必要です。遊びの本質を見極め、遊びにつ

いて考えていくことや、子ども自らが「〇〇したい」と思える環境を工夫したり、見直したりしながら、遊びこめる子どもに育てることが大切です。

次に、保育の可視化と記録の省察を重ねることが重要であり、このことにより子ども達が遊びを作り、また遊びを育てることが可能となります。保育を表情や言葉、動作などで具体的に語ることや子どものありのままの姿や行為、変化を伝えることが保育者にとって大切です。

これからは、遊びの中での子どもの学びや育ちを細やかな視点で捉えられるように、関わっていきたいです。保育者間で子どもの姿を共有することにより、自分だけでは見えていなかったことや、気づきもあるので、子どもの育ちの方向性を園全体で共通理解し、遊びや保育を充実させていきたいと思います。

講演の冒頭でまず「Society5.0デジタルで創る、私たちの未来」の動画を視聴し、衝撃を受けました。これからの未来は、様々なことがデジタル化し、誰もが便利で豊かな生活を送ることができるようになるという内容に驚きの連続でした。また、少子高齢化や地方の過疎化、防災などの現状課題を解決できるという点が希望もてる社会になると感じました。

幼児教育においても、デジタル化することにより、コロナ等の感染症対策や SIDS（乳幼児突然死症候群）対策などの安全や健康を守ることができたり、保育プロセスの質が向上したりと、利点は考えられます。しかし、幼児教育は正しい答えやマニュアルがなく、応えがないところを追求している点が AI にはなく、保育者の醍醐味であるとのことでした。

やればすぐにできる体験は、自己肯定感を育むため

に必要であり、少し難しい課題に挑戦し、工夫することを学ぶために必要です。それは人間にしかできないことであり幼児教育には大切なところであると思いました。

また、令和5年4月に発足した「こども家庭庁」による「こどもまんなか社会」の実現に向けた取り組みでは、子どもの育ちに必要な愛着が生きる力につながっていくと示されています。子どもの育ちを支えるためには、人間同士の温かいつながり、コミュニケーションが不可欠であると思います。

これからの未来はデジタル化し、ますます便利な生活になっていくと思われます。しかし、人間にしかできないこと、また、デジタル化になっても変わらずに守っていかなければいけないことが幼児教育にはあると講演を通して学びました。



公立保育所・公立認定こども園セミナー

●報告者 藍住町立中央保育所 的場 紀子

基調報告は、小松島市立横須保育所の新田所長より公立保育所の現状や活動などの報告がありました。公立保育所の定員数に対して現員数は約半数となっており、公立保育施設に入所する人数が減ってきているのが現状であると感じました。少人数ではありますが、子ども一人一人を大切に寄り添う保育や、SDGsを意識した取り組みがされていることが伝わってきました。また、令和5年度から公立施設の新しい取り組み～保育所指導担当の新設～として様々な研修の実施等、職員全体で資質向上に向けて取り組まれている等、他公立保育所の様子を知ることができました。

グループ討議では、『地域の課題について』と題して



3～4人グループで問題点等を話し合いました。住んでいる場所や地域により問題点も異なりますが、他の保育所・園の様子を聞くことができ有意義なグループ討議となりました。

午後からは、鳴門教育大学 田村隆宏教授より『気になる子どもの理解と対応』と題しての講義を受けました。分かりやすい資料を基に発達障害について話をいただき、今回の研修で再確認することができました。

今日の報告や研修に参加したことで、今後も子ども達一人一人を大切に、寄り添いながら保育をしていきたいと思っています。



保育士リーダー研修

講師 午前 日本赤十字社徳島県支部 藤川 勇実氏
午後 同志社大学赤ちゃん学研究センターセンター長 板倉 昭二氏

●報告者 桑島保育所 玉井 千鶴

新型コロナウイルス感染症が5月から5類に移行しましたがその後も感染は続き、さらにインフルエンザやアデノウイルス、感染性胃腸炎等も流行しています。コロナ禍より日常的に感染対策は行ってきましたが今回の講義を聴き、今保育所で行っている感染対策を確認したり見直したりする機会となりました。感染対策の標準予防策として食事の前、調乳前配膳前、おむつ交換後、嘔吐物処理後には石鹸を用いて流水でしっかりと手洗いをを行う。施設の衛生管理として保育室は日々の清掃で清潔に保つ、ドアノブ・手すり・照明のスイッチ等は水拭き後アルコールで清拭する。加湿器はハイブリッド式・蒸気式の使用時には水を毎日交換する、常時換気を行う。洗濯できるおもちゃは洗濯・乾燥する。洗濯できないおもちゃはアルコール清拭を行う。園庭でも砂場を定期的に掘り起こし日光に当てる等、日常的に気を付けておかねばなりません。保育所内の様々な時や場所での感



染対策を念頭に置き、また、保育所で注意すべき感染症についての知識をもって対応し、流行規模が最小限になるよう感染対策をしっかりと行っていきたいです。

午後からは「赤ちゃん学」のお話でした。「赤ちゃん学」とは赤ちゃんの行動・認知・身体を対象とする研究だそうです。赤ちゃんの「こころとからだ」の発生・発達メカニズムを複合的に検証していて、研究したことをたくさん聞かせていただきました。アイコンタクトは生理的覚醒度が高まる。映像を見せての実験から、乳児は発達初期から向社会行動を示したり助けを必要としている他者を理解していたりしています。先生のお話から、乳児は人と関わる大きな力を持っているんだということを改めて実感しました。今後も目を合わせて表情豊かに話しかけたり触れ合ったりしてスキンシップをとるといった関わりを大切にしていきたいです。



研究発表 〈ともに育ち、ともに生きる〉を見据えて～遊びの伝承と保育の関係性を考える～

徳島市地区

四国大学附属保育所 中田陽子

本保育所は基本理念に〈ともに育ち、ともに生きる〉を掲げ、子どもの育ちを保障するために、子どもを中心に保護者、保育者、地域も〈ともに〉成長することを目指しています。生活の中で 0～5 歳児までの年齢の異なる子ども同士が〈ともに〉の連続性や実体験することで得る心の育ちが、環境や遊び、生活の伝承により子ども達の自尊感情を高め「生きる力」の基礎となること〈ともに育ち、ともに生きる〉を捉えた保育が幼児期にどう働きかけるのか実践研究しました。

ふとした生活の中で、感じられる年上の子が年下の子の手を握る時の優しさや年上の子の遊びの真似事を自分たちでもやってみる姿、泣いている子がいたら寄り添い「こうするといいよ」「一緒にしてみよう」など遊び方や生活の工夫を伝承し実体験で芽生えた感情は

喜びや発見、葛藤を繰り返しながら子ども達の心の根っこを大きく成長させていたと思われます。

異年齢交流は新型コロナウイルス感染症が流行する前からの取り組みでしたが、保護者アンケートの実施で子どもに対する思いを共有できたことや異年齢交流でさまざまな刺激や体験により感じる成長を子ども発信で保護者が気づき、情報を共有できたことは保育者の喜びにもなりました。

この取り組みを通じ、子ども達の思いや関わる姿を見守ることで、異年齢交流の在り方や子から子へ伝承される保育の連続性の大切さを再確認することができました。子ども・保護者・保育者が今後も〈ともに〉子どもの成長や子育ての楽しさを共有し合える関係が構築できる保育を展開していきたいと思います。



異年齢交流の様子



職員研修

研究発表

あそびから学ぶ保育をめざして～SDGsの視点を取り入れて～

阿南市地区

桑野保育所 大西祐子 / 山口保育所 上田浩子 / 富岡保育所 勘角あゆみ / 今津こどもセンター 山口百合子

近年、気候変動による異常気象、海や森など自然環境の破壊や汚染、感染症など解決しなければならないたくさんの課題があり、これらの課題を解決するため 2015 年に SDGs（持続可能な開発目標）が定められました。未来を担っていく子ども達に SDGs の考え方を伝えていくことが大切ではないかと考え、保育者が SDGs を意識した保育実践を行うことで、子ども達に持続可能な社会の担い手としての基となる心を育てたいという願いをもってこの研究に取り組むことにしました。

私達が SDGs を意識して保育を行うことで、子ども達も「これも SDGs やな」と生活のなかで SDGs に気付く姿が増えてきました。栽培・クッキング・コンポストに取り組むことで食の循環や命のつながりを感じたり、感動体験をすることで生き物に関心をもち優しく触れ合えるようになってきました。また、自分達の生活のなかで何が必要かを考え友達と話し合うなかで、分別・再利用について知ったり製作をしたりす

ることで物を大切に使う気持ちも育っていったと考えられます。そして地域の人々と関わることは自分の住んでいるまちを知ることにつながっていきました。様々な体験をするなかで身近な大人から気持ちに寄り添ってもらい認められることで自己肯定感が育まれたと考えられます。また、日々の育ちの姿をドキュメンテーションで子どもや保護者に知らせることで、親子での会話が生まれ、子ども自身も自分の行動を振り返ったり保護者に認められたりしたことが SDGs 実践への成果の 1 つです。子ども達が楽しみながら日々のあそびの中で「見る・触れる・聞く・匂う・味わう」ことによって五感を使い、多くの経験を積み重ねることにより、今の自分の行動がよりよい未来へとつながっていくという学びになったのではないかと考えられます。

今後も SDGs の意識をもち、保護者、地域と協力し、子どもが身近な人や物、事象そして世界や未来へ思いをもてるように保育に取り組んでいきたいと思っています。



ペットボトルキャップからワクチンへ



チョウとの触れ合い

研究発表 乳児期の食事場面における保育者の援助と環境構成について ～豊かな食体験を通して食べる意欲を育む～

中央地区 いいきッズ 小井田友美・久米温子

コロナ禍で産まれ育った在園児は、食事場面でも感染対策を重視され、楽しい食事場面が失われていることに気づきました。そこで、生きる原点であり信頼関係を育む食事環境を見直し、楽しい食事場面に戻すことを目的として実践研究に取り組むことにしました。

第1期は「コロナ禍での給食援助や食事環境」とし、感染対策のため一定方向を向いて食べることが当たり前になっている現状を踏まえ、ビデオカンファレンスによる食事環境や食具、食器、食べる姿勢等の見直しを行い、職員間で共通理解を深め食育への意識向上を図りました。

第2期は「第1期の食育活動を活かし、子ども達の食べる意欲を育むために」とし、野菜が苦手な子どもが多いことから栽培活動や収穫した夏野菜を使った簡単なクッキングを行い、子どもの興味や関心を育て、自ら食べておいしいと感じられる食育活動を行いました。また、保育者が感じた楽

しい食事場면을保護者と共有できるよう、栽培活動の様子や自分で食べられる環境づくりを食育だよりで配信し、ムービーにして参観日に観てもらう時間を設けました。研究を進める中で、園内研修を行い、ビデオを活用するなど職員間でのコミュニケーションを図ることでお互いの意見を理解し認め合い信頼し、課題に対するPDCAサイクルを継続した結果、保育の質が向上し始め、食べやすい環境づくりを行うことができ、安心して嬉しそうに食べる子ども達の姿が見られるようになってきました。

研究を通して、自己評価や意識改革を繰り返し、保育者同士が意識を高め合い連携し、多くを学ぶことができました。楽しい食事場面を取り戻すだけでなく、保育者自身が大きく変容できたと実感できるようになりました。

今後も、子ども達の姿や仕草に教えられながら、より良い援助や楽しい食体験ができるよう取り組んでいきたいです。



手作り足置き



グループワーク

研究発表 虫との関わりから育む子どもの心 ～子ども主体の保育を目指して～

三好地区 東みよし町立みかも保育所 宮内真紀・佐藤恵子

本保育所は、子どものつぶやきに耳を傾け「指さし・喃語・まなざし・表情・ジェスチャー・表現」などから共感し、子どもが何でも話せる信頼感や共感を築き、一人一人が大切にされ認められるという自己肯定の芽を育てていきたいと願い日々の保育に取り組んでいます。以前から、周りに自然があるのにうまく保育に取り入れられていないこと、園舎が入り組んだ構造のため複数クラスでの異年齢交流が難しいという課題がありました。その中で、夢中になって虫を触る子どもの姿から、身近な虫を触ってみたい、飼ってみたいという意欲を広げるため、生き物と関わる中で子ども達の心情がどう発達していくのかという研究を進めていくことにしました。

まず、自然と触れ合って遊ぶ保育計画を作成し、つぶやきやドキュメンテーションを持ち寄ってカンファレンスを行い、園庭に虫が住む環境作りをしたり、子どもの姿を伝えあいアイデアを交換したりして保育に繋げて

いきました。そうすることで子ども達は主体的に虫と遊び始め、異年齢での交流も増えてきました。つぶやきやドキュメンテーションは、保護者に保育内容や子どもの成長を知らせて共有できるきっかけになりました。カンファレンスを繰り返すことで、子ども一人一人を知ることができ、一人一人に寄り添った言葉がけや援助ができるようになっていきました。子ども達は保育者に温かく肯定的に気持ちを受け止めてもらい、やってみたいことに次々と挑戦し、探究心、好奇心を満たしその中で自分の考えを友達や保育者に伝えたり、自分とは違う友達の考えに気付くようになり仲間関係が育っていきました。いたわりや小さな命についても感じ保育者と一緒に考えるようになってきました。

今後もつぶやきに耳を傾け、職員間で連携を取りながら一人一人の心の育ちに寄り添っていききたいと思えます。



樹液にきた虫、発見！



なんだろう？



コオロギ飼ってみたい



第1回の総務企画部会は、5月19日の代議員会終了後に開催しました。その後、7月と10月には、県保連の組織体制等について協議を行いました。県連及び他の関係団体における役割において、現在の役員割当や研究発表は、施設負担が大きく、時には保育に支障をきたしているとの意見があり、各ブロックの状況や課題を取りまとめて協議しました。ブロックによっては、施設数の減少や施設規模に差があり、職員不足も重なって厳しい現状も報告されましたが組織体制等は直ぐに改善出来る課題ではないため、これまでの経緯も考慮しながら関係する専門部会等と連携して継続した検討をする必要があると感じています。

8月には、処遇改善加算Ⅱに関わるキャリアアップ研修の実施主体について協議を行い、徳島県に申請する方向で意

見がまとまりました。その後、県へ申請手続きを行い、全保協や県保連が行う研修の一部が認定こども園に限られますが、処遇改善加算Ⅱ対象研修となりました。すでに文書で周知されているところです。県保連の研修が処遇改善等加算対象研修になったことは、会員であるメリットの一つととらえられると思います。

新型コロナウイルス感染症が5類感染症になって日常生活が以前に戻りつつありますが、保育現場では様々な課題と向き合いながら日々の保育が行われています。総務企画部会でも時間の許す範囲で日常業務は勿論のこと行事の実施等について情報交換を行いました。子ども達の笑顔を願う先生方の努力を伺うことができました。

研修部



令和5年度は、保育夏季大学や新任保育士研修・中堅保育士研修などの階層別研修が計画通り開催されました。県内外から素晴らしい講師先生を迎え「保育内容・防災・マネジメント・保護者支援」など、多分野にわたる研修を開催することができました。研修会当日は、担当ブロックの先生方・事務局の方には、会場準備や講師先生のご案内など、きめ細やかな打ち合わせや準備をしていただき、大変お世話になりました。

研修部での活動内容は、第1回から第3回の部会において来年度の研修内容についての事業計画・講師先生との日程調整等の事業進捗確認や、令和5年度の各研修会におけるアンケート結果の報告等の話し合いをしました。アンケート結果については、どの研修も満足度の高さを感ずる回答をい

ただしました。本年度は、新型コロナウイルス感染症が5類の位置づけになり、会場での参集型の研修を開催することができました。講師先生の講演を直接受講することができたり、参加者同士のグループワークなどを実施することができたりと、活発な話し合いも行われ有意義な研修になりました。研修に参加して得た学びを踏まえ、子ども達と関わり、各園で共有され職員の資質向上に繋げてほしいと思います。

本年度より、研修部長を務めさせていただくこととなり、この一年間、部会員の皆様や事務局の方にご協力いただき、ともに活動でき大変勉強になりました。今後も研修会を通して共に学び合う場として、質の高い研修をめざせるよう、次年度に繋げていきたいと思っています。

保育士部



保育士部は毎年開催している保育研究発表大会に向けての事前準備として、鳴門教育大学の湯地先生をお招きし、発表園（所）の研究内容にご助言をいただき、協議を行いながら学びを深めてきました。

保育実践を科学的に分析し、保育者の気づきや子どもの育ちに専門性を発揮し研究することの大切さや、実践結果を具体化するための表現方法・伝え方を学びました。取り組みを通して、実践研究が子ども達の育ちや、私達の資質向上になくしてはならない必要なものだと感じています。

実践研究の際には「保育を高める実践研究の手引き（全国保育士会）」がホームページに掲載されていますのでご利用ください。

また、大分市で開催された全国保育研究大会にも参加し、令和5年4月1日に設置された「こども家庭庁」や「こども基本法」の内容を学びました。全国保育協議会の取り組み

と制度動向への対応では、①次元の異なる少子化対策②安全・安心な保育の実現③人口減少地域における保育課題④認定こども園における課題⑤改正児童福祉法について等、様々な課題の現状に合わせて検討を行いながら、さらなる保育の充実が図られるよう国に要望を行っている取り組みの報告がありました。また、全国保育士会の活動については、保育を取り巻く環境が大きく変化している状況においても「子どもの最善の利益」を保障し続けるための保育内容の実践、保育現場から保育の専門性や保育の魅力・やりがいを発信するとともに、保育士・保育教諭等の仕事を正しく理解できるような情報提供を、私達自らが行政や地域社会に広く発信することが大切であることも改めて考える機会となりました。「だれひとり取り残さない」というスローガンのもと、次世代を担う子ども達の育成を支えていくために、皆様と共に学びを進めていきたいと思っています。

給食部



勝浦みかん保育園

西浦 美紀

今年度は、10月に給食担当者研修会をアスティとくしまで行いました。午前は鳴門地区から研究発表「地産地消から始まるより良い食育～鳴門のええもん再発見～」を報告していただきました。

・地産地消がSDGsに繋がること、その役割や課題を子ども達に伝えて、自分達の住んでいる地域で栽培したり収穫されたりする食材を知り「本当に美味しいもの」を給食に取り入れる活動も、食育に繋がると考えて研究を行う。

・保護者には、子どもや保護者に鳴門の特産品に関心を持ち、食に関する知識を身につけてもらうためにアンケート調査を行ったり、子ども達には実際に食材に触れたり栽培やクッキングを行う。

このように様々な地産地消の取り組みが、食を通して生涯にわたり心豊かで健康な生活の礎を培うことができるようにこれからも取り組んでいきたいとまとめられました。

その後、四国大学生生活科学部教授曾川美佐子先生に講評と「保育施設における食育実施状況と食育実践の効果につ

いて」をご講義いただきました。

午後からは、徳島赤十字ひのみね総合療育センター顧問中津忠則先生に「小児肥満の現状と取り組み」について講義いただきました。徳島県は生活習慣病の一つである糖尿病の死亡率がワースト1であることや、生活習慣は子どもの頃にその基礎が身につくので、子どもの頃からの取り組みが重要です。特に味の好みやライフスタイルは幼児期に刷り込まれて、学童期になると改善が難しいとのことでした。乳幼児期の食育が生涯通して人生を左右するほどの影響があるといわれる大切な時期に、私達は関わらせてもらっているということを再確認する機会をいただいた有意義な研修となりました。

また年3回の部会を通して、その都度保育施設が抱えている問題点や悩み等を話し合い、部員同士の交流を図っています。これからも子ども達に美味しく、安全安心な給食を提供できるように頑張っていきたいと思います。

広報部



彩保育園

谷口 恵美

広報部では本年度も「保連とくしま No.89」を10月1日に、この度「No.90」を3月1日に発行することが出来ました。また、発行に際しまして徳島県未来創生文化部子ども未来局こどもまんなか政策課長大井文恵様をはじめ、各会員園の皆様に原稿の執筆をいただきましたこと部員一同、感謝申し上げます。

今年度より、広報部は安藝担当副会長のもと各地区の部員14名が参集し事務局にご協力をいただき、企画・原稿依頼・編集、そして丁寧な原稿検討を行っています。原稿検討では、情報を発信する上で、読みやすさや見やすさは基より、執筆者の意図を確認したり、レイアウトの意見を出し合ったりと熱心な検討が行われています。

本年は、たくさんの研修会が参集して開催され、会員の皆様が子どもの豊かな育ちに向けて学びの機会がたくさんあり、報告も充実した内容となりました。私達保育者は子ど

もの最善の利益を保障し、心身の成長を育む大きな役割を担っているという、保育に関する基本原点に立ち返り、今一度、日々の保育を行って行きたいと思えます。

これからも「保連とくしま」が保育に関わる皆様にとって興味や関心を持って、気づきや学びになるような情報を発信していけるように努力致します。執筆依頼がありました折には、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。ありがとうございました。



認定こども園部



みつほしこどもえん

佐々木 海

認定こども園部会は、令和5年度より新しく設立された部会です。認定こども園の新規設立や移行が年々増加しており、認定こども園の運営方法や仕組み、制度なども深く理解していく必要があります。その中で認定こども園部会は、来年度に向けて各種研修の参加や勉強会の実施を検討しています。

認定こども園部会の令和5年度の主な取り組みは、私が所属しているみつほしこどもえんの施設見学と認定こども園部会のメンバーによる意見交換を2日に分けて実施しました。認定こども園として抱える悩みや課題はもちろんのこと、保育現場だからこそその問題点も意見交換をしている内に出現し、一つの質問から様々な効果的な意見や情報が飛び交う非常に有意義な会となりました。来年度においても引き続き認定こども園部会に所属する園の見学を行いたいと考えています。

認定こども園部会を開催する度に園長先生方が多くの悩みを抱えて園運営に当たっていることを実感します。これは子ども達の健やかな成長を保障するための「覚悟」を持っていらっしゃる故だと感じます。私達は常に子どもの生死にも関わる責任ある職務に当たっています。その職責は非常にス

トレスフルなことです。だからこそ悩みながら答えの無い道を進んで行かねばなりませんし、非常に孤独感を感じる職務だと思います。その孤独感を認定こども園部会では少しでも解消できるようにしていければと思っています。まだまだ若輩ではございますが、諸先輩方に指導していただきながら認定こども園部会の部長として責任を全うしていく所存です。



全国保育士会
被災地支援スキャンボ募金



研修会場に設置しています。
ご協力お願いいたします。